

「ハンセン病問題と長島」

会期：令和8年（2026）5月28日（木）～9月29日（火）
協力：国立療養所長島愛生園/瀬戸内市市民部市民課
展示担当：公益財団法人 瀬戸内市歴史まちづくり財団

瀬戸内市邑久町虫明の長島には、長島愛生園（ながしまあいせいえん）、邑久光明園（おくこうみょうえん）という2つの国立療養所があります。ハンセン病は「らい菌」によって引き起こされる感染症ですが、患者は病気が治った後も差別や偏見にさらされました。

本展では、あらためてハンセン病問題を考えるため、療養所の中で実際に使われていた道具など、関係資料を紹介します。

長島のハンセン病療養所

現在、全国にはハンセン病の国立療養所が13カ所設置されています。そのうちの2カ所が、瀬戸内市邑久町虫明の長島にある長島愛生園と邑久光明園です。

長島愛生園は、全国で最初に設置されたハンセン病の国立療養所です。昭和5年（1930）に開所式が行われ、翌年から患者の収容が始まっています。初代園長には、光田健輔（みつだけんすけ）が就任しました。

邑久光明園は、大阪にあった外島保養院（そとじまほよういん）が前身です。外島保養院は、2府10県（大阪・京都・兵庫・奈良・三重・和歌山・滋賀・岐阜・福井・石川・富山・鳥取）の患者を収容する公立の療養所で、明治42年（1909）に開所しています。

昭和9年（1934）9月の「室戸台風」で壊滅した外島保養院は、翌年、長島を復興の地と定められ、1938年に「光明園」として開園しました。その後、1941年に国立に移管されて「邑久光明園」となり、現在に至っています。

消毒用に穴があけられた 投票箱

右の写真は、選挙のときに邑久光明園の投票所（邑久町第10投票区投票所）で使われた投票箱です。箱の側面に消毒用の小さな穴があけられています。

邑久光明園と長島愛生園では、「らい予防法」第18条にもとづいて、投票済みの投票用紙が入った投票箱を、密閉加圧容器内で薬剤消毒していました。

最後に使われたのは平成7年（1995）4月に行われた岡山県議会議員選挙のときで、邑久町選挙管理委員会の資料によると、同年6月に、次の選挙からは消毒を行わないことが決められています。

翌年（1996年）4月には、「らい予防法」が廃止されました。



園内通用票（えんないつうようひょう）

昭和5～23年（1930～48）

長島愛生園蔵

逃走防止のため、入所者は通常のお金を持つことができず、愛生園内の売店のみで利用できる特別なお金を使用しました。



スプーン・フォーク（補助具つき）

長島愛生園蔵

ハンセン病の後遺症の一つ、運動神経の麻痺により、指先が動かなくなったり、指を失ったりしている場合があります。このスプーン・フォークは、補助具がつけられ、手のひらなどにはめて使えるようになっています。



ボタン掛け（ぼたんかけ）

長島愛生園蔵

ハンセン病の後遺症の一つ、運動神経の麻痺により、指先が動かなくなったり、変形したりしている場合があります。ボタンをかけやすくするため、工夫された道具が作られました。



二重湯呑（にじゅうゆのみ）

長島愛生園蔵

ハンセン病の後遺症の一つ、知覚神経の麻痺の影響で気が付かないうちに火傷してしまうことがあります。

この湯呑は二重になっており、熱が外に伝わらないようになっています。



新良田教室関係資料（にいらだきょうしつかんけいしりょう）

長島愛生園蔵

昭和30年（1955）9月16日、長島愛生園の中に、岡山県立邑久高等学校定時制課程「新良田教室」が開校しました。

新良田教室は、ハンセン病の療養所内に設置された全国唯一の高校で、全国の療養所から入学者が集まりました。4学年で定員は合計120人。32年の間に397人が在学、307人が卒業し、卒業生の多くは社会復帰しました。

昭和62年（1987）3月3日、閉校記念式が行われました。

